

新加坡中国文学 2022年9月1日发行 (每月一刊) 第100期 第100卷第9号

诗

9

2022

第100期(总第100期)



青水無月

能村 研三

ファン・ロンパイ氏来日

はんざぎの面見て発憤しどころぞ

夕景となるまで端居してゐたり

松のため堀削るなり風死せり

古書店の気まま商ひ水を打つ

茸櫓の一山蒸せる半夏生

荒涼たり畳の中に昼寝覚

走者みな西日の的の復路あり

青竹のすつくと太し夏祭

神仏の寄り添ふ里や青水無月

サンダラス外し判官鼻肩かな

欧州連合（EU）初代大統領で、俳句愛好者として知られるヘルマン・ファン・ロンパイ氏が七月に来日された。俳句ユネスコ登録推進協議会の名誉顧問も務める方で、七月十一日に鎌倉の鶴岡八幡宮の直会殿で開催された俳句ユネスコ登録推進協議会のシンポジウムにも参加いただいた。当日は地元之星野高士氏のご案内で、ファン・ロンパイ氏夫妻とともに八幡宮本殿に参内した。

ファン・ロンパイ氏は講演の中で、「俳人は季節の変化やそれによって表れるさまざまな小さなものことから目を反らさない。たった17音で、これらの観察や体験を詩に昇華させ、複雑な現代社会の中で、俳句を作ることが出来る。俳人は、ときに自然が牙をむき、季節が気まぐれを起こすことも承知している。だからこそ調和を求め、暴力や戦争を支持しない。戦争の脅威が身近に迫る今の時代、改めて、俳句が平

和を望むものであること、俳句が安らぎを人々の心にもたらしてくれるものであると痛感している」と述べていた。ファン・ロンパイ氏は、日本に11日間の滞在中、鎌倉での講演をはじめ岸田総理や林外務大臣に面会するなど、俳句ユネスコ無形文化遺産登録に向けて全国各地を訪問され勢力的に活動された。

俳句ユネスコ登録推進協議会の活動は今年で六年目を迎えたが、2017年に、国際俳句交流協会会長であった有馬朗人先生が推進協議会を組織し、俳句協会など俳句四団体と47の地方自治体の支援で構成されていて、昨年より私が会長を務めている。鎌倉の総会には、自治体として入会したばかりの、市川市の田中甲市長も駆けつけていただき、力強いご挨拶をいただいたのも嬉しかった。

ユネスコ登録への道はまだまだ険しいものがあるが登録実現に向けて、文化庁などの指導のもとに一步一步努力していかねばならない。

蛇の衣蔵の梯子を上りかけ
群青の沼を抱きて山滴る
すれ違ふ人を疑ふ木下闇
蛇苺かはいい嘘を聞いてやる
ごきぶりに往復さるる電話中
地べたごと灼くる鉄製農具かな
隠棲のごと万緑の端に生く

登四郎先生には秋風を詠んだ句が実に多い。和歌には立秋の日に秋風を詠んだ名歌として、藤原敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」があるが、この風の音をじいっと聴きいるのとは対照的に、先生にはじいっと風を見つめいる「秋風に白湯注ぎ湯気のゆくへ見る」という句がある。何れにしても秋風というものは心身にしみじみと染み入るものであり、そこに「秋風」という季語の本情がある。

学生時代には帰省すると鮎を獲ろうとよく川へ潜った。秋風が吹く頃は水も少々冷たく、近くで鮎や雑魚を追う子供の声もない。心細さを振り切って水底の岩にへばり付くと、大きな鮎は鮎の屈かぬ光を悠然と泳いで行く。そんな静けさのなかで心音だけが虚しく響く時、不意に東京へ帰らねばと思うのであった。これも何れも秋風の寂しさが為せることだったと思う。

蒼茫集

夜 涼

辻美奈子

*スカイツリーの根張のあたりより夜涼
紙切つて吊るせばそよぐ星祭
水打つや貝殻うづめある三和土
吉兆とせり蜘蛛の子のうすみどり
更地てふ跡形もなき暑さかな
フリスビーばふつと落ちて夏行けり

夕歩き

千田百里

*けふ夏至の暮れて瓶・缶分くる音
五千石はいづこに富士の山開
西郷の巨眼巨体や星月夜
速報の電子文字追ふ街暑し
パリ祭を遠に夫婦の夕歩き
パリ祭の夜やカルバドスを酌まむ

山影

能美昌二郎

*釣り上ぐる鮎に山影動きけり
黒南風や声の重なる魚市場
翡翠の嘴に散る鱗かな
田植終へ風の生まるる夕べかな
水張ればたちまち増ゆる蛙かな
栗の花雨に匂ひを濃くしたり

斜面都市

荒井千佐代

枇杷の生る家の重なる斜面都市
方舟に片足かけて昼寝覚
*ははの髪思ひ出しつつ髪洗ふ
青葉木菟ねむれば一と日命減る
花朴やいま人生の正念場
足の藻を足で外して夏終る

角打ち

町山公孝

クラクション啼き炎屋の野辺送り
*角打ちの肩を寄せ合ふ夕立かな
滴りに強き意志あり大河へと
ふらり来て娘は昼寝して帰る
森を抱く鎌倉五山蟬しぐれ
四尺玉小千谷の夜気を解き放つ

明日飛ぶため

峰崎成規

スカイツリー丸洗ひして梅雨明くる
*夏雲の沸騰めくや水平線
森閑をなほも深むる夜の瀧
海月知るや人に浮世のあることを
虹の脚生活犇めく街に立つ
子子の明日飛ぶためのストレッチ

潮鳴集

トロッコ列車

平松うさぎ

万世の

本池美佐子

* 祈ること螢袋の一途なり
耳のみを聴く炎天歩きをり
言ひ分の並べて五分五分文字摺草
万緑の風着るトロッコ列車かな
山彦や腹の底まで夏野なり

* 打水や日本に高度成長期
混沌の社会を叱咤電猛る
万世の時を刻めり瀧の音
染筆のかすれ涼しき掛字かな
巴里祭ぴんと張りたるコック帽

墓の黙

菅原健一

あめんぼう

須賀ゆかり

翅とちて天道虫に戻りたり
少年のカレー搔つ込む大暑かな
* 祭笛たかぶるほどに哀しかり
世を拗ねてゐるわけでなし墓の黙
梶子の辺り生死のとけ合へり

涼しさの青年のまま逝かれけり
樟・仲里眞経様
* 水といふ文字の集へりあめんぼう
山滴る 秩父十九番 札所
今朝までの雨に濁りの男滝かな
三方も祝詞も濡らし男梅雨

威

栗坪和手

頼り無し

三好千衣子

* 曝涼の本に静かな威のありぬ
祭来る真青に長き竹の箸
青簾海辺に棲みて海に生き
鮎の鮮仲里眞経川瀬の音に笹香る
西日入る声の残れる編集部

蓮咲いて神苑寂と明け初めし
阿子池に暮れじと暮れぬ白蓮
蘇民将来路地に涼しき声ひびく
ふるさとに戻りて外すサンダラス
* 夜濯ぎや女物とは頼り無く

庭師来て

川高郷之助

箱庭

中村重幸

* 庭師来て緑蔭小さくして帰る
泉汲む光り射したるところより
電車待つ二分の長き猛暑かな
となり国論こちら俳論ジャホール
甚平着て思考回路を変へにけり

田を植ゑて田にふさはしき風渡る
かまへゐて漢字のごとき墓
* 箱庭に己を置きて仕上げけり
啼く声の月に吸はるる青葉木菟
別人のごとくきびしく蚊を叩く

合歓の花

宮岡

弘

軽鴨の子

広海あぐり

宿坊のとなり宿坊富士詣
地下街の下に地下街お中元
縄文の埴輪にタトゥー百日紅
* 不器用に生きて器用に田草引く
合歓の花本音伏せゐる京言葉

* 螢袋似てる似てない三姉妹
軽鴨の子のかたまつてまたちらばつて
言はざりし言の葉舞ふや螢の夜
鬼灯市地下の床屋にまづ寄りて
芒種かな地学教師の銀時計

飛鷹選評



能村 研三

巴里祭や読み即秘する文ひとつ

川崎登美子

下五で「文ひとつ」と述べているので、おそらくは抽斗などを整理している時に、昔の手紙が出て来たのだろう。遠い昔のことだが、それを手にすると心ときめくものがあった。近くに誰かいたのかどうかかわらないが少し顔を赤らめながら咄嗟に隠してしまった。「巴里祭」の季語から、この手紙の内容がほのかに恋ごろを抱いた時代のものと読みとれる。「読み即秘する」の措辞にはのかな青春時代の甘酸っぱさを感じる。

明易し一舟すでに沖がかり

枇杷木 愛

旅に出て、海に面した宿に泊まると、潮騒の音で目が覚める。日の出は五時前だが、四時ごろから空が明るくなって来て、こんな朝早くから一艘の舟が沖に出て漁を始めている。満ちてくる波を追うように、さらに満ちてくる波。波と波がぶつかって真っ白なしぶきを上げている中を一艘の舟が停泊しているのが窓から望めた。

螢袋なればたましひ仮寝する

浜田はるみ

「螢袋」というと、登四郎のへ螢袋何に触れむと指入れし〳〵の句を思い出すが、日当たりの良いところに俯き加減に咲く螢袋の花、花芯を隠すかのようにしているので、余計に袋の中の様子が気になるもの。しかし、だれにも

影響を受けないような咲きぶりは、こころを仮寝させるには丁度良いところなのかも知ない。

時の日や老いてわづかに待ち上手

笠井 令子

齢を重ねて仕事などを引退した後は時間もゆっくりになり、自分なりの時間で生きられると捉えればよいと思うようになる。他者へ配慮をした生き方というものが見えてきて、人を待つにも焦ることなく、いつしか待ち上手になってきた。

一筋に蜘蛛降り来てや風を織る

牛島 晃江

蜘蛛そのものは決して愛らしい虫ではないが、雨の玉をいっばいちりばめて自く光っている網は美しい。蜘蛛は一筋に降りてきて作る網を見ていると迅速で巧緻なのに驚く。それは風の吹き加減を心得て織っているようだ。

水音の光り大きく夏つばめ

原 ひろ子

本来なら「水音」は音として聞こえてくるものだが、水音を光るものとして捉えたところが面白い。川のせせらぎを望みながら夏つばめが大きく旋回していく様子がうかがえる。

鮎鮎や仕事の話後にして

佐々木 茂

作者にとつて「鮎鮎」は好物であったのだろう。鮎鮎をいただくとした瞬間に、宴席の相手から仕事の話を持ち掛けられ、すかさず折角の鮎鮎なので仕事の話はあとにしよう願した。

沖作品



能村研三選

くちなしを嗅いで隣へ検針員

千葉

川崎登美子

* 巴里祭や読み即秘する文ひとつ
月涼し三叉路に立つ精米所
富士山へ向き筑波へ返す田植かな
若竹や玻璃戸の開かぬせんべい屋

静岡

枇杷木 愛

* 明易し一舟すでに沖がかり
結界を出て玉虫の彩失せり
梅雨明や竹節虫枝に伸びきつて
けふの日を閉ぢ込め暮るる紅蜀葵
水腹に出で炎昼の街ゆらぐ
枇杷熟れて手漕ぎの舟で渡る島
木道に沿ひし小流れ桑いちご
半日を水辺で過ごす大暑かな
縁側の蚊遣火かげぼふし重ね
* 螢袋なればたましひ仮寝する

埼玉

浜田はるみ

* 不時の日や老いてわづかに待ち上手

山梨

笠井 令子

南天のつぶやくやうに花の散る
梅雨の夜やたどる草書の筆運び
草刈のあとの匂へる湖畔かな
忍冬の花の向かうの雨の音

千葉

牛島 晃江

* 一筋に蜘蛛降り来てや風を織る
いかづちの雲よりバンジージャンプかな
浅き夢見しや夜啼きのほととぎす
世は哀しバンドネオンの巴里祭
「革命」を弾く人涼しピアノ
万緑や土偶は子安神にして
* 水音の光り大きく夏つばめ
梅雨の日は柁目浮き出づ御開帳
老鶯や石屋は平に石を切る
業平を思うてぬしか杜若

長野

原 ひろ子